

中部大学生物機能開発研究所の第1期の活動を振り返って

本学の生物機能開発研究所は2つの目的を持って開設されました。その一つは生命科学技術を中心としたニューバイオを系統的にしかも概括的に教育研究する新たな学部を構想することであり、もう一つは生物機能の解明と開発に関する専門研究を進めることでした。本研究所を開設して今年で7年になり、当初の目的は着実に実行され予期した以上の成果を上げてきたと、自負しています。

新学部の設置構想では、従来の縦割りの生物関係の教育体制に捉われることなく、理学、農学、工学、薬学等を横断した教育研究組織を立ち上げ、生命科学技術に関する先端知識の現場への応用を一つの柱とした教育課程を組み、応用生物学部として教育研究を進める体制を重視しました。第1回卒業生を3年前に出し、卒業生の進路を見るにつけ、新学部はその成果を上げつつあるといえます。学年進行により2年前に大学院修士課程を新設し、40名近い大学院学生を受け入れ、若さに満ちた大学院教育を始めました。そして、来年度からは大学院博士後期課程の設置が認可され、定員を超える大学院学生の入学が予定されています。3年後には学部—大学院一貫体制が完成することになり、本学は生命科学技術関係の高等教育研究機関としてその実績を世に問うことになります。

一方、研究設計に関しては、学部の発足と同時に文部科学省の「私立大学学術研究高度化推進事業」の1つとしてハイテクリサーチセンター整備事業に向けて、「食の安全に関する基礎研究」を立案しました。平成13年にこの事業が認められ、応用生物学部の教員によって5年間の研究を開始しました。本計画の申請時には、まだ、社会の食の安全・安心に対する関心は低く、この研究課題が時流に乗ったものとはなっていませんでしたが、多くの予兆はありました。この状況を先取した研究計画でしたので、賛同を得るにはかなりの時間と多くの説明を要しました。決して予定通りの研究推進とはなりませんでした。予期した以上の研究成果を挙げることができました。そして、この3月に終了することになりました。

本報告書にはこの「食の安全・安心研究」の成果を中心に報告することにしました。本研究所はその第一期の事業を果たし、これからは第二期の研究活動を展開することになります。本研究所の活動に対する皆様からのご批判とご支援をいただければ幸いです。

2007年3月

中部大学長 山下 興亜